

## いま、演劇を上演すること

川口典成氏（演出家、ドナルカ・パッカーン主宰）

コメンテーター 鶴戸 聡 氏（明治大学国際日本学部准教授、アラブ＝ベルベル文学研究）  
司会 日置 貴之（明治大学情報コミュニケーション学部准教授、日本演劇研究）

2020年10月3日（土）13時～16時

新型コロナウイルス感染拡大のなかで、演劇の公演にも大きな影響が及んでいます。2月中旬以降、多くの公演が中止となり、現在も多くの劇場では観客数を制限し、さまざまな感染対策を講じた上で公演をおこなっている一方、舞台映像のネット配信や、「オンライン演劇」の試みも活性化しています。

今回は、7月に、事前のネット上での詳細な情報発信、稽古・公演期間中の関係者および観客の厳重な感染対策のもとで、大塚・萬劇場において野田秀樹作『野獣降臨』を公演したドナルカ・パッカーン主宰・川口典成氏にうかがいます。

第1部では、新型コロナウイルス感染症流行下で公演を行なった上での実感や、いま演劇公演を行うことの意味などについて川口氏にお話しいただきます。第2部では、アラブ＝ベルベル文学研究の鶴戸聡氏を交え、感染症と戦争との違いと類似性、「非日常」の状況における文化・芸術、現実とフィクションとの関係等について討議していきます。

### 川口 典成（かわぐち のりしげ）

1984年、広島県生まれ。東京大学思想文化学科宗教学宗教史学専修課程、卒業。同大学院宗教学宗教史学、修了。ピーチャム・カンパニーの代表・演出として活動。2011年10月に東京タワーの目の前に位置する芝公園にて、フェスティバル/トーキョー11公募プログラム参加作品として野外公演『復活』（脚本：清末浩平）の上演を行った。続く2012年に原子力時代の想像力を問う三島由紀夫原作『美しい星』を演劇化。2015年には再び小説『美しい星』の哲学問答部分を抜き出し『対話篇 美しい星』を上演。現在ピーチャム・カンパニーは、日本演劇における言語と政治・権力のあり方を見つめ直すため、演劇上演を無期限に休止。川口個人として演劇実験場であるドナルカ・パッカーンを立ち上げ、日本における演劇と戦争との蜜月にあった「歓び」を探求し、2017年7月には森本薫の国策放送劇『ますらをの伴』を上演した。外部演出として、2015年に『ザ・モニュメント 記念碑』（作：コリーン・ワグナー）を演出、2016年に江戸系操り人形の糸座の『長靴をはいた牡猫』（原作：ルートヴィヒ・ティーク）にて脚本・演出・出演。演劇上演という場における「同質性／異質性」の表れを通じて、共同体における「召喚／排除」を思考する演劇活動を行なっている。

### 配信 URL

事前予約等は不要です。こちらのURLで配信を行います。  
なお、当日はコメント機能を使用して質問・意見を受け付けます。さまざまな立場からのコメントをお待ちしております。



[https://youtu.be/\\_ZPr2-YRYJ0](https://youtu.be/_ZPr2-YRYJ0)

### 主催

明治大学情報コミュニケーション学部日置貴之ゼミナール

### 問い合わせ先

hioki@meiji.ac.jp